



手話サークル研究班



～ 「手話」は聴覚障害者にとって大切な言葉です ～

～ 「手話サークル研究班」の思い ～

メディアや地域で開催されている手話講習会の影響で手話に興味を持つ人たちが増え、「手話」に対する理解は確実に広がってきました。

でも、「手話」への理解が広がることと、「聴覚障害者」への理解が広がることは、イコールではありません。

手話に関われる時間、年齢等々、さまざまな条件の人たちが集うサークルでは、当然手話技術レベルはまちまちだと思いますが、そこにこだわる前に「手話」を健聴者の自己満足な趣味に終わらせることなく、学んだ手話を通して「聴覚障害者と共に歩む」ということが大切だと思います。

「手話サークル」の役割は、学んだ手話を通し、ろう者と交流しながら「手話」と共に「聴覚障害」に対する理解を深め、聴覚障害者と地域をつないでいくことだと考えます。

～ 「手話サークル研究班」のプロフィール ～

☆2004年4月、9名のメンバーで発足。

☆神通研集会・分科会「手話サークル」の運営を担当。

☆その他、神通研・関東通研・全通研の行事、集会に参加。

☆2007年4月現在、川崎3、横浜2、県域11 計16名で活動中!

～ '06年神通研集会 第1分科会報告～

～ サークルでの悩みは? その2 ～

- ・ 指導者不足。ろう者主体で教えて欲しいが、指導できるろう者が少ない。健聴者全員が、国語の指導が出来ないのと同じ。
- ・ 学習したい健聴者と交流したいろう者とのギャップ。
- ・ せっかく教えても、「忘れた、忘れた」の繰り返しは、困る。
- ・ 手話技術レベル、手話を覚えたいと思う気持ちも目的もまちまちなので、どこに焦点を当てて指導して良いか悩む。
- ・ 地域ごとの実状、地域のろう者の考え方にも違いがあり、サークルの基本的なあり方を統一していくことは難しい。
- ・ 役員が替わると、サークルの方向性も変わってしまう。
- ・ 役員を呼びかけても知らん顔されるのは、寂しい。役員だけに全てお任せの「お客さん」のような意識の人もある。みんなで運営を担って行くところという意識が変わって欲しい

お互いを尊重し、コミュニケーションを大切にしながら、悩んでいることは共有して、みんなが気軽に参加できる場所になると良いですね。

～ 定例会 ～

※ 3/31 (土) 定例会を行いました。

19年度神通研の「サークル研究班」主催学習会についての詳細を話し合いました。

これまで取り組んできた「災害時のサークルの役割」の第1歩として、中越地震被災地にてボランティア活動を行っていらした方を講師にお迎えし、実際に体験されたことを参考に、一人ひとりに出来ること、サークルに出来ることを参加者と共に考えていきたいと思います。

学習会の準備中にも、発生予想の低かった能登半島での大地震。日本はどこでも被災者になりうるということが実証されてしまいました。

出来るところからの備えを少しずつでも行っていきたいと思います。

【次回定例会】4月22 (日) 10:30~12:30

かながわ県民センター 12階 ボランティアコーナー

～サークル研究班メンバーのささやき～

もうすぐ1歳6ヶ月になる娘が、今、急ピッチで言葉を覚えようとがんばっている毎日だと、妻から聞かされ、それを毎日、傍で見守れる妻を、羨ましいと感じる今日この頃です。

「OOって言ってごらん?」と言うと「●▲~!!」と得意そうに真似てみるらしく、言葉の原点は正にマネをすることなんだと、改めて1歳児に教えられています。

将来、娘が成長してパパと一緒に仲良く手話を学んでくれるのを心待ちにしている、親バカな私です。S☆K